



TITLE:

「洋場」の「洋人」：張愛玲小説の
外国人

AUTHOR(S):

濱田, 麻矢

CITATION:

濱田, 麻矢. 「洋場」の「洋人」：張愛玲小説の外国人. 中國文學報
1997, 54: 83-108

ISSUE DATE:

1997-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177794>

RIGHT:

「洋場」の「洋人」

——張愛玲小説の外國人——

濱 田 麻 矢

京都大學

はじめに

中國現代文學において上海が果たしてきた役割が大であることは多言を要しまい。この都市が作家に對して強烈な吸引力をもつと同時に廣大な讀者層をも抱えていたことは、文學のみならず廣く文化的背景を表す「海派」ということばからも窺えよう。吳福輝氏はその著書で「海派文學」の特徴を一、外來文化を中繼する前衛的性質をもち、二、讀書市場に迎合し、三、工業文明を享受する、四、完全に新しい文學であるとする。^①しばしば對照される「京派」と比較したとき、なによりも特徴的なのは上海の「外來性」であろう。事實、一八四三年に阿片戰爭の敗北によって開港

「洋場」の「洋人」(濱田)

を餘儀なくされるまで、上海は人口二十數萬のこれといつて特徴のない大都市にすぎなかった。その後百年あまりの間に上海の人口は五百萬をゆうに越え、世界でも有數の大都市に成長してゆくのだが、今我々の思い描く上海のすべては南京條約による強制開港からはじまったといつてよい。つまり上海は近代都市として誕生したその瞬間からその内側に外國人を抱えていたわけである。彼ら外國人は、やはり大變な勢いをもって増加する一方であつた内地の移民とともに上海の膨張を構成する重要な要素となつていった。イギリスをはじめとしてフランス、アメリカ、日本、ドイツ、ロシア、イタリア、ポーランド、チェコ、インドなど、最も多い時には五十八に及ぶ國家及び地域の、十五萬人以上の外國人が上海で生活している。^②日本人を含む多くの外國人が、自分が體驗した上海についてさまざまな印象を書き残しているが、中國人作家はその小説の中で上海の外國人をどのように表現しているだろうか。本論は日本による傀儡政府に撤收される租界の終焉をみとどけた作家、張愛玲(一九二一—一九九五)の小説及び散文に現れる外國人の形象

をとりあげて植民地上海がもっていた西洋觀及び中國觀を考へようとするものであるが、張愛玲の作品を讀むと同時に、彼女以前の上海文學、いわゆる「海派」小説に現れる「洋人」および「洋」的なものについても觸れることにしたい。そうすることによって張愛玲文學のもつ特異性がよりはっきりすると思うからである。なお、本論では「洋人」つまり西洋人に關する記述を主にとりあげることにし、次いでインド人、混血兒（ユラシアン）について觸れることにしたい。「洋人」は金の髪、高い鼻、青い目など、「他者」であるとはつきりわかる身體的特徴をもつ「ガイジン」であり、それ故に街角にたたずんでいるその姿を描寫するだけで一種の「異國情緒」が醸されることになる。植民地上海に住む作家が「洋人」という「外」國人をどうとらえていたか知れることは、「外」に對する「内」地が彼らにとっていかなる意味をもっていたかということを知る手がかりにもなるだろう。

一 「洋人」の登場

上海開港から共產黨による「解放」まで百年餘り、上海に外國人が住んだ歴史は長いが、それはまた無名の都市であつた上海が中國現代文學の中心地として成長してゆく過程でもあつた。費成康氏の『中國租界史』^④は上海における租界の歴史を四段階に分けて考へている。一八四三年の開港から一八六三年における英米租界合併までを形成期、一八六三年から五・三〇事件の一九二五年までを全盛期、更に日中戦争が勃發する一九三七年までを動搖期、汪兆銘内閣によつて租界が撤收される一九四三年までを終焉期とするものである。費氏のいう租界形成期において外國人との邂逅をテーマにした文學は、阿片戦争前後の文人による詩歌や農民によつて傳へられた民謡をもつて嚆矢とする。しかしこれらの作品は、生活をおびやかす外部からの侵略者への怒りと、その侵略に對して無力である既存の朝廷への失望という極めて古典的な「亡國恨」を表現するものであり、たまたまその侵略者が「外國人」であつたということ

にすぎない。外敵である彼らは、「誰か能く賊をして江南の民を殺さしめざらん」といったように多く中國の太平を脅かす「賊」として表現される。^⑤

しかし侵略者であり植民者であるところの「洋人」たちの居住化は大變なすみやかさをもってすすめられた。欽差大臣桂良は、一八五八年に上海を訪れた段階ですでに驚きを以て「上海地方、城外東北兩面の江岸は全て系れ夷人の房屋なり。」と記している。一八四三年に二六人しかいなかった外國人は、一八六〇年には五六九人を數えていた。^⑦

また一八六六年、ヨーロッパの旅を終えて上海に戻ってきた張德彝は、その繁榮ぶりについて「(新北門の)外はもとこれ荒野にて一望するに蒼茫たりしが、西人ここに至りて遍く樓房を造りて爾來十餘年、屋瓦は鱗鱗として幾ど隙地無し。土人其地に名づけて『夷場』という。……三百年來の古墓荒邱、易りて靡麗繁華の地と爲る、人事の變遷は智者の能く逆睹するところにあらず。」と書き付けている。^⑧一八六五年、上海の外國人人口は二七五七人にも達していた。「夷人」と呼び「夷場」と名付けるのは、「中華」でないも

『洋場』の「洋人」(濱田)

のを即ち「夷」とするいわゆる中華思想の發現ではあるが、事實上これらの記述に表れているのは荒れ野に過ぎなかった黃浦江沿いにイギリス、アメリカ、フランスそのものを運び込んだ外國人たちへの驚愕であり、もはや「夷」に對する輕蔑ではありえない。事實一八六〇年代に、外國人宣教師は次のように勝利を宣言しているという。「いたるところに外國人がいて、しかも際立っている。外國人は、すべての富、社會的な影響力、それに權力の寶庫であり、源であると考えられているが、それも當然だろう……事實、外國人には何一つ缺けているものがない」。^⑨

こうして上海の「洋」化が進んでゆくにつれ、文學が描く對象にも「洋」的なものが續々出現することになる。始め竹枝詞などの題材として珍しげに描かれた洋人たちの風俗は、一八七二年に發刊された『申報』などの新聞や雜誌に續々と載せられてゆき、八四年に創刊された『點石齋畫報』は繪入りのかわら版という體裁で西洋人たちの競馬やダンスといった中國人にとっても珍しい風習を紹介しているが、やがてこうした洋式のスタイルがモダンなものとな

して租界に住む中國人にとりいれられるようになってゆく。いわゆる四大譴責小説を初めとして、晩清に書かれた章回小説には上海における「洋」的なものが不可欠な要素となっているが、その中でもっとも早い例として一八九四年に完成した『海上花列傳』に觸れておこう。渡米後の張愛玲が吳語から標準語に翻譯した小説でもある。

『海上花列傳』で展開する一九世紀末の上海では、四馬路を中心に廣がる繁華街で、登場人物はお氣に入りの妓女を連れて亨達利洋行など外國資本の店で買物をし（第六回）、洋食のフルコースを客にふるまってチキンカレーやミルクコーヒを樂しみ（第十九回）、外國人巡查には外國語で話しかけるほど「洋」化が進んでいる（第十一回）。これらの情景は上海のモダーンをひきたたせ、田舎からきた主人公の青年、趙樸齋を眩惑するが、吳氏がいうように「四馬路は西洋人の娛樂の方法を導入したが、その中にある娛樂の精神を會得してはいなかった」^⑩。彼らの道樂が古い酒を新しい革袋に入れたようなものであったことは、娛樂の精神のみならず時折現れる外國人に對する處し方によって

も確認される。趙樸齋は友人の働くオフィスに外國人の姿を認めると「恐ろしくなつて息をひそめ、じつとすわったまま手に汗をにぎつて」いるし（第十三回）、病氣の李漱芳は晝間外國人をみたからというだけで「二人の外國人につれていかれる」夢にうなされる（第二十回）。彼らは西洋的なモノを享受して自分の生活を彩ることに熱心だが、西洋のヒト（巡查や門番をつとめるインド人も含める）はまだ他者以前の、「人」というより「鬼」に近い存在である（第十一回で、陳小雲はターバンを巻いたインド人巡查を「無常鬼」と見まがひ、冷や汗をかいている）。このように吳氏の言う舊「海派」が描いた外國人はおよそ人格をもたないのだが、では張愛玲を頂點とする解放以前の「海派」——さきほどの費氏の分類に従えば租界の動搖期及び終焉期に成立した小説——は、増え続ける「洋人」にどのような性格を賦與したのだろうか。

二 「洋場」の四十年代

張愛玲はその散文『西洋人が京劇などを見ると』^⑪で次の

ように語る。

「西洋人が京劇を見るまなざしで中國の一切を見てみることは、なかなか面白いことだ。頭上には竹竿が渡され、子どももの股割れズボンが干してある。カウンターのガラス瓶の中には「參鬚露酒」が満たされている。こちらの家では蓄音機が梅蘭芳をながし、あちらの家のラジオでは疥癬の藥の宣傳がかかっている。「太白遺風」の幟まで行って少しばかり料理酒を買う……これらはみな中國だ、入り組んでいて、まばゆくて、神秘的で、滑稽な。若い人の多くは中國を愛しているけれど、自分の愛しているものがない。いどんなものなのかを知らない。(中略)私たちは不幸にも中國人の間で生活しているので、華僑が一生涯安全に、適當な距離において神聖な祖國を崇拜できるのにはとてもかなわない。なら、いっそ詳しく見てみよう。西洋人が京劇を見るまなざしで一切を觀光してみよう。驚愕と眩惑を経て初めて明らかになり、初めてしっかりした愛情が生まれる。」^⑩

この散文は一九四三年六月にドイツ人 Klaus Mehnert

「洋場」の「洋人」(濱田)

主編の上海の雑誌「The XXth Century」に「Still Alive」という題で載せられたエッセイを中國語に書き改めたもので、のちに漢奸文藝雜誌の代表とみなされる『古今』に掲載されている。(引用した一段は英文版にはない。)ちなみにその前年、一九四二年には解放區延安において文藝座談會が開かれて毛澤東による講話が發表され、國統區重慶でも國民黨の文化責任者張道藩によって「我々が必要とする文藝政策」が發表されている。全中國の作家が「抗日」の一點で團結するよう求められていた時代に、「中國人であること」から離れて中國を觀察することを提案した張愛玲の文學が、抗日ナショナリズムからいかに縁遠いものであったかを示す一例である。もちろん、日本に占領された淪陷區にとどまって執筆を續けた作家は、張愛玲ならずとも民族主義をテーマにした文學など創作できるはずがなかった。當時日本の植民地であった臺灣でも、また東北の「滿州國」でも民族主義は彈壓され、日本語による創作までが強要されている。ただ張愛玲のいた上海が他の淪陷區と異なっているのは、その内側にあまりにも多國籍の外國人を

抱えていたことである。一九四二年の段階で、上海にいた外國人は一五〇、九三一人。そのうち占領者である日本人が九四、七六八人を占めていたというが、日本人を引いても總人口三九萬人強に對しての外國人人口は大變多いといわなければならない。たとえば當時東亞同文書院で教鞭をとっていた若江得行は、その著書『上海生活』^⑬で

「上海のフランス租界のロシア人經營のアメリカン・バーで支那人のボーイの英語入のサーヴィスでイギリスの紅茶を日本人が飲むと云へば、先づ七つのちがつた國名を用ひねばならぬが、上海と云へば、先づ之程までも國際的であると云ふ一つの證據になるわけである。」と決して日本一色に塗られていたわけではない上海の國際性を強調している。四二年の段階で日本人の次に人數が多かったのがイギリス人の五、八六五人であり、その後ドイツ人、ポルトガル人、インド人、フランス人、白系ロシア人、ソ連人、アメリカ人、ポーランド人……とさまざまな國籍が続くのだが、そうなれば同じ「外國人」というカテゴリーの中に、更にこまかなヒエラルキーが生まれることになる。

一九四〇年一月三十一日付の『上海工部局公報(中文版)』には「布告五一八七號」として個人が警務人員を雇用できる旨の廣告を出している。租界終焉期において「外國人であること」がどのような價值をもっていたかを端的に表すものだ。一日八時間工部局警察の人員を「雇用」するとなると、

騎馬の西洋籍巡長或いは試用巡長	七十元
騎馬のインド籍巡長或いは巡士	二一元
西洋籍巡長或いは試用巡長	二八元
日本籍の巡長或いは試用巡長	十四元
インド籍の巡長或いは巡士	十一元
中國籍の巡長或いは巡士	五元

さらに月極めで「雇用」する場合、インド籍の巡長または巡士なら八十四元、中國籍の巡長または巡士なら五十八元であると付記されているが、中國人の警察に一ヶ月來てもらうよりも馬にのった西洋人に一日きてもらうほうが高いというのだから、租界における「西洋籍」の價值というものがあるのかわかるだろう。そしてまた、同じ「西

洋籍」であってもイギリス、アメリカ、フランスといった領事裁判権の所有國からきた人々が壓倒的に政治的、經濟的優位に立つ一方で、故國の内亂から逃れて上海にたどりついた白系ロシア人やユダヤ人は「窮洋人」として中國人からも侮られた。「洋人」とはみなされなかったインド人は元來イギリス人によって公共租界の警備役として連れて

外國人（二）



(2) 英國太太碰到天災人禍，事無大小，總叫你：「親愛的，鎮靜一點。」

「洋場」の「洋人」（濱田）

附圖 散文集『流言』（上流中國科學公司1945年）に附された張愛玲自身による挿圖。「外國人」に對する觀察の細かさうかがえる。

こられたのであったが、そのうち商業的に大きな成功を収めるものが表れ、彼らは政治的權力ではなく經濟的優位によって上海の一翼を擔っている。さらに、「外國人」と「中國人」の間には租界が年月を重ねた結果として多くの「混血兒」が生まれているし、「中國人」の中にも外國でアイデンティティを獲得した「華僑」や歐米諸國で價值觀を學んだ「出洋留學生」がいる。さらにい

うなら移民の街上海では、「中國人」のうち上海の籍貫をもたないもの、つまり「外地人」が一九三六年で七六パーセント、一九四六年で七九・三パーセントを占めている。その上海で育ち、アメリカ系のミッシヨンスクールで英語教育をうけた後に香港大學で英語一色の生活を送った張愛玲に「中國人であること」の意識が稀薄であったことは想像に難くない。先に引用した散文のような提案

も、「西洋人のまなざし」を獲得できるだけの文化的背景を持った彼女にして初めて生まれた發想であろう。先に舉げたエッセイの英語版「Still Alive」に付された主編 Klaus Mehnert のイントロダクシヨンは言う、

「……アイリーン・チャンは中國人であるにも関わらず、他の多くの同國人と違って中國を自明のものと捉えていない。彼女が中國人を外國人に理解させることができるのは、彼女自身の同國人に對する深い好奇心のなせるわざである」^⑭。

中國的なものと西洋的なものの、どちらの文化も吸収しつつ、またそのどちらにも歸屬することのない張愛玲の境界性は、その小説の登場人物が持つ國際性にもあらわれている。以下、淪陷期に書かれた張愛玲小説に沿って彼らの姿を見てゆきたい。

二 (一) 略奪者から流亡者へ——植民地の白人像

阿片戰爭の勝利者として上海の租界建設に最も力あったのがイギリス人であり、その人數は一九一〇年代に日本人

によって凌駕されるまで外國人の中では最も多いものであった。一九二八年までパブリック・ガーデンの入り口に「大と中國人は入るべからず」と書かれていたのは有名な話だが、共同租界、フランス租界は完全な治外法權を有しており、市の歳入の大半は中國人による納税でまかなわれていたにもかかわらず、一九二六年まで中國人には工部局の選舉權も被選舉權も與えられなかったのである。ポットの『上海史』^⑮は上海の古き良き日について、「外國人居留民は一つの家族のやうなものであつた。(中略)外國人は廣い地所を構へて大きな屋敷に住み、一寸と呼びさへすれば直ちに應じて侍る大勢の召使を抱へ、まるで王侯のやうな生活をしてゐた。外國人は自己本位の民團の中で多くの廣汎な特權を享有し、商業關係以外のことでは外部の支那民衆とは何の掛り合ひもなかつた。」と言う。租界の全盛期、他のどの植民地とも同じように、支配者は被支配地上海にいてというだけの理由で優越感に浸り、權勢をふるうことができたのであった。三十年代の新感覺派を代表する作家の一人、劉呐鷗の短編『禮儀と衛生』^⑯は、外交官から骨董商

に轉じたというフランス人ブルーエ（普呂葉）が「眞の現實の汚れた欲情を少しもたない」東方の骨董を愛でるのと全く同じ眼をもって「瞳の中に東洋の祕密を藏した」中國の女に執着し、骨董店の全てと引き替えに主人公の辯護士の妻を手に入れる話である。「なぜなら現在では、どんなものでもすべて商品として價值を規定することができからです。」とブルーエは主人公に持ちかけるのだが、性を含む植民地におけるすべてを商品化し、消費しようとする態度はすぐれて植民地主義的だということができるだろう。ブルーエは「ややもすれば雌の蟻螂の本性をむきだしにし、異性を食用にしようとする」西洋女性を「ただの欲望の對象にすぎない」と批判する一方で「見れば見るほど秀麗で、まったく欲情を喚起しない」東洋女性の美を「發見」し、自らが上海で蓄えた富とひきかえにその美を「購入」して連れ歩き、征服をはかる。ポットがいうように「商業關係以外のことでは外部の支那民衆とは何の掛り合ひも」もない富める西洋人たちは、自分たちのアイデンティティにいささかの動搖も感じることなくお氣に入りの東洋を切り

「洋場」の「洋人」（濱田）

抜いて持ち歸ることができたのである。

先ほど引用した張愛玲の散文も、そうした「洋人」の東洋に對する幻想（オリエンタリズム）を逆手に利用したものと見えるだろう。しかし、彼女の小説が描く植民地在住のイギリス人のアイデンティティには大きな龜裂が入っている。たとえば『紅いばらと白いばら』^⑦で上海の街を歩いているイギリス人のアッシュ（艾許）夫人は混血兒と結婚しているために「いつもよくよく氣をつけて、本格的なイギリス」人であろうとしなければならぬ。「彼女の夫は中國で生まれた第三世であり、彼女の在英の最後の親戚も既に亡くなっている」にもかかわらず、あるいはそうであるからこそ、彼女はイギリスを「家」と表現するのだが、初對面のシンガポール華僑、王嬌蕊は彼女が「家」に歸ったところでイギリスの中下層階級に屬するにすぎないことを一目で見抜いてしまう。

『うちの主人ったら中國のものを『溺愛』してるんですよ！』遠方からの金満家といった口振りを聞けば、まさか彼女の夫には半分中國の血が混じっているとは思うまい。^⑧

アッシュ夫妻が中國によせる「溺愛」と先ほどのブルーエ氏が中國婦人に寄せる愛情の違いは明らかである。ユラシアンであるアッシュ氏も、純粹なイギリス人であるアッシュ夫人も、もはや本國に戻れる場所はない。彼らは植民地にいるかぎり金満家のポーズをとることを許されるが、その立場の危うさは華僑の王嬌蕊に簡單に見破られるほどだ。彼らの生きる場所は植民地上海以外になく、彼らが中國を「溺愛」していると稱するのはその弱さを隠蔽するためのみぶりにすぎない。危ういのはユラシアンの家族だけではない。香港は上海と並んで張愛玲が小説の舞臺に選んだ土地であるが、『沈香屑——第二爐香』のミッシェル（蜜秋兒）夫人は「早くに夫を亡くしたが、三人の娘を連れて歸國するだけの力がなかった」ために香港で娘婿を選ばざるをえないのである。ミッシェル夫人の婿となった主人公のアンバートン（安白登）とても、その結婚に失敗して勤務先の大學から追放された時、十五年前に離れたイギリスに歸することはできない。彼は「唯一の故郷」と自ら認める香港にとどまって自殺することを選ぶ。『桂花蒸れて阿小秋

を悲しむ^②」のガーター（哥兒達）氏（國籍は明らかにされていない）は「中國の枝葉をくわえてきてつくりあげられた」、「白系ロシア人の高級娼婦の化粧部屋を思わせる」ちまちました部屋を上海につくりあげており、阿媽の阿小はその客嚮ぶりを容赦なく友達に暴露している。劉呐鷗の書いたブルーエ氏は東洋の美を（つまり中國人女性を）購入して上海から持ち出そうとしていたが、張愛玲描くガーター氏は中國人の愛人に高價な銀の食器を買わせることで自分の東洋趣味を満足させているのである。

このように、張愛玲の描く「洋人」は以前の「海派」小説の「洋人」が備えていた強さを全く缺いている。彼らはほぼ例外なく本國に對してコンプレックスを感じており、その劣等感を植民地内でのみ有効な權力によって解消しようとして試みているのだ。彼らは中國人との差異を強調することによって「白人が植民地で維持すべき聲望」（『沈香屑——第二爐香』）を保とうとするが、作者はそのからくりを完全に見破っている。張愛玲だけがなぜこのような「洋人」を書き得たのか、それについては後で考察を加えることにして、

續いて「持たざる」外國人について述べることにしたい。

二 (二) 零落した王女達——「持たざる」外國人

十月革命以降祖國を追われたロシア人の多くは世界で唯一パスポート無しにいける街、上海を目指した。一九三一年、滿州事變によって東北地方が日本に占領されたのち、その人数は更に増えた。つとに二十年代、一萬二千人ほどだと推計されていたロシア人人口は、一九三六年には二萬千人を超えていただろうといわれる。^② 國籍をもたない彼らは治外法權によって守られることなく、中國の法律によって裁かれた。一九一七年の十月革命から相當長い時間にわたって、彼らは租界内の選舉權も與えられなかったのである。「二等公民」とされた彼らの就職狀況は芳しくなく、多くのロシア人女性がダンサーとなつて家族を養わざるをえず、娼婦に身を落とす者もすくなくなつた。^③ 『申報』は「今後上海のダンス史を語るとすれば、ロシア人がその第一ページを占めるべきだろう」と傳える。^④ また一九三〇年の共同租界工部局による調査は、租界内のバーホステスの

「洋場」の「洋人」(濱田)

うち九十パーセントがロシア人であるという。^⑤ ロシア人ダンサーの姿は、例えば穆時英の『ナイトクラブの五人』に端的な例を求められるだろう。

「白人の快樂、黒人の悲哀。アフリカの黒人の、食人の祭典の音楽。大小の雷のようなドラムの音、響きわたるチューバの音、眞ん中の床では、一列に並んだスラブの王女たちが黒人のダンスを踊る。一本一本の白い脚が黒い緞子につつまれた體の下で跳ねる。——(中略) おどる、スラブの王女たち、おどる、白い脚、白い胸と白い下腹、踊る、白と黒の塊……」^⑥

ことさらに「食人の祭典」などという「野蠻」な言葉と組み合わせながらなおも「王女」と呼ぶことによつて、ダンサーに身を落とした白系ロシア女性のかほそさ、みじめさがより強調される。矛盾『子夜』では「帝政ロシアの皇女、王女、貴嬪、才媛」がとつておきのサービスをする店が、やはり「白い胸と白い脚」というイメージを伴つて紹介されている(第九章)。當時、上海の「白系ロシア女性」はそのまま「没落した貴族」を表すコードであつた。ナイ

トクラブや賣春宿にいる彼女たちの悲惨な境遇を強調することによって、國際都市上海特有の陰影を申し分なく演出することができたのである。

しかし、張愛玲の描く白系ロシア女性王女でもなければダンサーでもない。『若かりし頃』^②のロシア女性シンシア（訖西亞）は晝は外資系企業で、夜は外國語學校でタイピストをしている「少しばかり器量がいい平凡な少女」だ。

彼女に思いをよせる主人公の中國青年、潘汝良が仕事場に會いにいくと、彼女は唇についているかもしれないパンくずを氣にしつつ、「小心翼翼と、口紅がラインからはみ出ないように」ひっきりなしに口元を拭っている。そのシンシアが幼い頃ハルピンにいたこと、實父を亡くし、繼父の給料が少ないために貧しい暮らしをしていることが汝良に簡単に語られるが、その境遇は「スラブの王女が場末のナイトクラブで踊る」という刺激的かつステレオタイプな悲惨さとは全く種類の違うものである。シンシアが口にするのは妹の結婚といった平々凡々たる話題にすぎない。

「上海には、いいロシア人は少ないの。イギリス人やア

メリカ人も少ないわね、今はもういなくなっちゃったわ。ドイツ人はドイツ人としか結婚できないし。」^③

そしてやがて、彼女自身も幼なじみの工部局職員との結婚を決める。

「それは世界でいちばん自然なことのようにだった——若い美男子のロシア下級巡官、小さいころから一緒に育ってきた。しかし汝良には判っていた。もしもうすこし機会に恵まれていたら、彼女は決して彼に嫁ぐことはなかったろう。」^④

實際、下級巡査と結婚したシンシアはすぐに新しい職を探し始めねばならない。（注②参照）

張愛玲がシンシアをロシア人として描いた意味は、國際都市上海で弱い立場にいる「窮洋人」が家庭を作ることの難しさにあったように思われる。十月革命から二十年以上の時がたった四十年代に、ロシア人にとっての上海はもはや一時的な避難所とはいえなかった。先に引用したアンバートンが香港を「唯一の故郷」とみなしたように、好むと好まざるに關わらず上海が彼らの「唯一の故郷」となった。

故郷とみなした地に第二世代が形成される——結婚と出産によって——のは當然であるが、弱い立場にある外國人（特に女性）は、できることなら租界のヒエラルキーにおいて少しでも上位になつて、すなわち「持てる洋人」（ここでははっきりとした政治的優位を持つイギリス人、アメリカ人、フランス人を指すとする）と關係を結ぼうとする。彼ら「持てる洋人」の優位に對し、上海在住の中國人はあるいは恐れ、あるいは憧れ、あるいは抵抗したが、ロシア人やユダヤ人に對してはそういった反應はなかった。日本という後發の外壓を別にすれば、「持てる洋人」と中國人が植民地社會の兩極の磁場であり、ロシア人、ユダヤ人といった「持たざる洋人」やインド人、ベトナム人（彼らは多く巡査か門衛として描かれる）といったアジア人はこの二つの磁場との關係によって、租界の周縁に位置するにすぎなかったのである。張愛玲は彼らについて「第三世界の人——中國にいる歐米人と中國人以外の一切のごちゃごちゃした人々」という言葉を用い、「白系ロシア人はまた別」としている。^③ 英米佛人のような保證された優越性をもたない彼らはしばし

「洋場」の「洋人」（濱田）

ば中國人に侮られ、恐らくそのためにより中國人を憎んだ。上海市警察局浦東分局は、一九二九年八月に「インド人とロシア人は中國人労働者に對して殘酷すぎるために各工場で不愉快な事件が頻發する」ため、外商は「門衛には中國人のみを雇用するよう」希望している。^④

「よいロシア人、イギリス人がアメリカ人」、シンシアが結婚相手として望むのは富める同國人が強國の人びとだが、そういった「持てる人々」が貧しい白系ロシア人であるシンシアを望むことはない。イギリスにとって、ロシア人と結婚することは中國人との結婚と同程度に不名誉なことであり、イギリスの會社の多くはロシア人女性と結婚した男性を解雇したという。^⑤ 逆にまた、シンシアの選擇肢に中國人は初めから含まれていない。汝良はシンシアに求婚する自分を夢想してみるものの、彼女の結婚を知る前にその夢を自ら放棄している。それが上海の「國際性」であった。どの國籍の人間も受け入れるが、國籍の差はそのまま階級差となり、いくつもの越え難い壁となる。

さて、張愛玲作品の中に「没落した王女」の形象が全く

ないわけではない。『傾城の戀』^③のサファイニ王女がそれである。「翳りのある大きな瞳に妖魔を宿し」た彼女は自稱王女といいながら前歴は誰にも定かでないという謎の女だが、彼女は白系ロシア人ではなくてインド人であり、より神秘的な色彩を與えられている（彼女についての描寫は全て上海人の主人公白流蘇の眼を通してかたられてゐる）。年若いタイギリス人パトロンについて上海から香港に渡つた彼女は、ブレイボーイの華僑范柳原をも誘惑しようと試みるのだが、日本軍によつて香港が陥落し、パトロンが收容所に入れられてしまうと「ちよくちよく彼女のために使い走りをしてゐた」インド人巡查に身を預けるようになってしまふ。かくして、開戦前にはパリの最新ファッションに身を包み、ゆく先々で「洋紳士」に囲まれていた彼女は「ぼさぼさの三つ編みをいいかげんにねじりあげ」、「どこから借りてきたのか黒の綿入れを着込んで」牡蠣のスープを范柳原に請うようになつてしまふ。戦争を期にしたサファイニの没落は、主人公白流蘇が同じく戦争をきっかけにして范柳原を手に入れる成功と見事に對照的なX字を描く。つま

りサファイニの不幸は流蘇の幸運をより際立たせる作用を果たすのだが、彼女たちの明暗はその配偶者によつてのみ決定されているのは印象的である。イギリス人と正式な婚姻關係を結んでいなかったサファイニは戦争によつてインド人巡查と同棲を始めるが、それはまさに香港における彼女の身分が支配（國）から被支配（國）へ没落したことを意味する。逆に香港陥落によつて范柳原と正式に結婚することができた流蘇は、富裕なイギリス華僑としての權勢を携えて上海に凱旋するのだ。シンシアの結婚觀にあからさまにあらわれていたように、彼女たちの地位はその夫の國籍で決まる。張愛玲小説において性差と國籍は複雑に絡まつてゐるのだが、本論ではこれ以上性差について立ち入ることはしないでおく。さて、このように國籍が錯綜する植民地では、國籍による階級意識が強烈であるにしても異人種間の結合（必ずしも法的な結婚を伴わずに）が行われ、結果として混血兒が誕生することになる。次に上海、香港における混血兒の形象を取り上げてみることにしたい。

二 (三) 二重の他者——「雜種人」

『現代漢語詞典』によると「雜種」とは一に異なる品種の植物または動物をかけあわせた新しい品種をいい、二人を罵る言葉であるという。また『漢語大詞典』は、(一)古代の少數民族に對する蔑稱、(二)罵語、(三)雜穀、(四)混じりあってできたものの比喩、という四つの意味をあげている。

しかし現代小説には、そのどれでもない「混血兒」という意味で「雜種」という言葉が多用されている。張愛玲の小説においても、前章で觸れた『紅いばらと白いばら』には英中混血の少女ローズやアッシュ夫人の夫などが登場するが、すべてに「雜種」という表現が使われている。清の趙翼『陔餘叢考』は「雜種」という言葉を「畜生」「王八」と並ぶ罵語とし、後漢書西羌傳に「滇零等諸雜種を招集す」とあるのに語源を求めている。恐らくは元來異民族の蔑稱として使われた言葉が罵語になり、そしていつからか混血をも表す言葉としてつかわれるようになったのだろう。四十年代に上海にいた武田泰淳は次のように書く。

「洋場」の「洋人」(濱田)

「そうだ。忘れていた。中國語には『ツァチュン雜種』という不氣味な言葉があった。それは他人を罵るときによく使われる。ツァチュンは、單なる混血兒の意味ではない。血がまじりあつてはなぜいけないのか？　だが、どうも、ツァチュンという語の響きは、われわれをおびやかす。雜種子ツァチュンと子までつくて、私生兒をよぶこともある。だけど、人類はだんだんと雜種の方が殖えてくるにちがいないのだ。合の子は何も特別なものではない。だが、そうばかりいって済むことではないらしいぞ。ともかく、ツァチュンを避けて通るわけにはいかない。」

泰淳ははるか邊域に嫁いだ王昭君に思いをはせ、異民族との混血という點から日本人と結婚した中國人作家陶晶孫の子ども達を連想している。その後引用文が續くわけだが、「血がまじりあつた」という意味の言葉が罵語でもあるのは「雜種(ツァチュン)」に限らない。中國語で西洋人との混血を表すもう一つの言葉「二毛子」は「西洋の手先」という罵語でもあるし、「合の子」もはっきりとした差別的色彩を有している。香港で展開する物語『沈香屑——第

「一爐香」^⑤に登場する周吉婕は「少なくともアラブ、ニグロ、インド、イギリス、ポルトガルなど七、八種類の血液が混じっていて、中國の成分はそのうち微々たるもの」という混血兒だ。

「年はだいたい一五、六にすぎないだろう。彼女の肌の白さは中國人の白さとは自ずから異なる、重苦しい、不透明な白だった。眞つ白な顔に淡い綠色をしたほの暗い大きな腫、まばらについた漆黒のまつげ、黒々とした眉峰、艶やかな緋色の厚い唇、その美しさは凄みを帯びていた」^⑥。

今も我々が「ハーフ」という言葉を使うときに賦與しがちな「神祕的な美しさ」という特徴を備えた彼女は「香港の若い世代で一、二に數えられる社交界の花」である。しかし吉婕は自分の美しさと神祕性が欲望の對象になりこそすれ、混血の自分に歸屬するナシヨナリティーをもたらず武器にはなりえないことを熟知している。純血の中國人あるいはヨーロッパ人が持ち得ない彼女の美貌が彼らの欲望をそそのめるのだが、同時にその美しさに付隨する神祕性が彼らをおびやかすからだ。「血がまじりあつてはなぜいけないのか？」海に向こうに彼ら自身のコミュニケーションを持つ「外國人」は一時的な客人或いは外敵にすぎない。しかし「雜種人」は「外國人（ニイリアン）」でありながら「同國人（ナシヨナルズ）」の血をもひいており、「我々」でありながら「彼ら」でもあるために「不氣味」なのである。

「（略）私は自分が雜種人でしよう、だからそういう苦勞をしてるのよ。ねえ、私たちにとって可能性がある對象は雜種の男の子に限られているのよ。中國人はだめ、だって私たちが受けたのは外國式の教育だから、純粹な中國人とはやっていけないわ。外國人だってだめよ！ここにいる白人に一人でも人種主義がしみこんでない人がいて？もし本人がうんといつたって、社會がうけいれてくれっこないわ。誰にしたって東洋人を娶つたらその一生はおしまいですもの。こんな時代に、だれがそんなロマンチックなお馬鹿さんになれるもんですか？」^⑦。

東洋的、神祕的な美しさで上海、香港の社交界に君臨しながらも香港陷落後には落ちぶれはててしまった『傾城の戀』のサフィーニ王女の運命は、吉婕のものでもある。

「雜種」である吉姫は「純粹な中國人」とはやっていけず、「人種主義が染み込んだ外國人」の社會には受け入れられない。ただ一つの選擇肢「雜種」と結婚することは、地域社會のよそ者として今うけている差別を受け續けることを意味する。どうあがいても彼女は社會の他者であり、よそのもの（アウトサイダー）である。彼女に向けられる性的な欲望は「他者」に對してのみ許される無責任なものでしかない。⑧

前掲の『紅いばらと白いばら』にも混血兒が登場している。主人公の佟振保が中國人の少ない留學先のエディンバラで英中混血のローズと交際を始めたのは「雜種」が中國人留學生よりも華僑よりも「鷹揚（原文「大方」）であつたためであつた。鷹揚、近づきやすいということは無責任な交際を——必ずしも性的な意味でなく、結婚を前提としな

「洋場」の「洋人」（濱田）

手に入れ、しかも彼女を捨てることができたのである。振保は彼女を愛するが、しかし彼女を中國に移植し、そのナシヨナリティーに對して責任をとろうとは夢想だにしない。イギリスに住み、富裕なイギリス人の父を持つローズに比べ、植民地に住む混血女性の場合は更に弱いものとなる。イギリスの中下層階級出身の母親と中國で生まれた「雜種」三世の父をもつアッシュ小姐は目につく美貌という特徴も與えられずに、憔悴した様子で上海の街を歩いている。

「アッシュ小姐は紅い唇をすぼめ、あまり口をはさむこともなかった。ほっそりした白桃のような顔についた一對の鳶色の目が一切を窺っている。」⑨

彼女は「その地位に全く據り所のない雜種の娘」であるため、「都會の職業婦人」特有の疲勞した窺うような視線はより鋭いものになっている。「彼女は若いだけで何ももっておらず、個性すらもちあわせていないのに、一つの整った世界の來臨を待っていて、その大きな陰影はもう彼女の顔に落ちているのだが、その他には彼女に表情とよべるものはなかった。」⑩

彼女は自分が内側の人間（インサイダー）になれる「一つの整った世界（一個整個的世界）」を待ち續けているが、幻想の世界への期待は彼女の無表情に憔悴した翳りを落とすに過ぎず、決して實現することはない。

吉婭やアッシュ小姐の焦燥や倦怠は、歸屬する場所をもたない「他者」であるという立場に由來する。混血の彼女たちだけではない。今まで見てきたように、張愛玲小説が描く外國人たちはみな上海（もしくは香港）以外に歸るべき場所をもたない、本國から切り離された異邦人という意味で共通する。彼らは上海（香港）の他者であり、よそ者であるのだが、では「外」國人を「外」部者たらしめる「内部」は——「中」國は植民地上海（香港）のどこにあるのだろうか。

三 「中國」はどこに？

景物描寫から始めよう。一九二〇年代、租界が最盛期を迎え、「崇洋媚外（西洋崇拜）」の風潮が高まっていた頃の上海がどのように描寫されていたか、一例として張若谷（一

九〇五—一九六〇）の散文をあげてみる。

「私たちはみな世界で六番目の都會である上海に住んでいて、異國情緒のすべてを自由に味わうことができる。龍華塔をエッフル塔と比べようとは思わないし、蘇州河が中國のベニスだという勇氣もない。けれど、マルセイユ港風の黃浦灘、ニューヨーク五番街風の南京路、日本は銀座風の虹口區、アメリカのチャイナタウン風の北四川路、そしてまた夏の黃昏時のジョッフル路は至るところ南歐の趣を有しているし、靜安寺路と愚園路にならぶ住宅のさまざまに趣向をこらした建築はまるでスイスの別荘のようだし、宗教的雰圍氣が濃厚な徐家匯はスペインの村落を思わせる。もし吳淞口の海水の色がかわったら、まるでエーゲ海そのままではないか？」^④

上海の國際性を誇る文章の典型といえるだろうが、今はあまり知る人もない張若谷という作家は、ここであげた異國のどこにも行ったことがないことを指摘しておかねばならないだろう。異國どころか、彼は上海以外の都市を殆ど知らなかったのである。上海の風物を使って語られるマル

セイユやニューヨークや銀座は、上海が喚起する想像上の外國のイメージに過ぎない。南京路がニューヨーク五番街に似ていることは、少しも上海の中國性をおびやかすものではないのだ。同時に、彼は上海に住んでいる自分が中國人であることを疑うことはないだろう。彼にとって上海を彩る「異國情緒」は銀幕に映る見知らぬ光景と變わるところはないのである。『海上花列傳』のミルクコーヒーがそうであったように、一九二〇年代の異國情緒も見る者を「モダンな」感覺に誘うことはあってもそのナショナル・アイデンティティーをおびやかすことはない。

三十年代になると、新感覺派がアルファベットを援用して上海の風景を活寫しようと試みている。

Neon light 伸着顏色的手指在藍墨水似的夜空裏寫着大字。一個英國紳士站在前面，穿了紅的燕尾服，挾着手杖，那麼精神抖擻地在散步。脚下寫着：“Johnny Walker: Still Going Strong.”

Neon light が色つきの指をのびし、青インクのような夜空に大きな字を描いている。一人の英國紳士が前にたち、紅

「洋場」の「洋人」(濱田)

い燕尾服を身につけ、ステッキを腋に抱えて、元氣はつらつと散歩している。脚の下には“Johnny Walker: Still Going Strong.”と書いてあった。

(穆時英『上海のフォックストロット』^②)

短い引用文からも、海派小説の洋化が一つの頂點に達していることが窺えるだろう。きれぎれのモンタージュ風のスケッチ、しばしば挟まれるアルファベットによって、ピジンイングリッシュにも似た獨特の作風が生み出されているが、このようにやや奇をてらった新感覺派獨特の文體はたしかに「都市風景線」(劉呐鷗)を描くのに適しており、上海がいかに「洋」に近づいたかを表すのにふさわしいものであった。

ところが張愛玲の上海は「洋的」情緒を強調しない。彼女の上海はむしろ中國的、東洋的である。

廣大的廳堂裏立着朱紅大柱，盤着青綠的龍；黑玻璃的牆，黑玻璃壁龕裏坐着小金佛，外國老太太的東方，全部在這裏了。

廣いホールには朱色の大きな柱が立っており、青緑の龍が

うずくまっていた。黒ガラスのかべ、黒ガラスの厨子にすえられた小さな金の佛、外國の老婦人の東洋は、全てここにそろっている。(鴻鸞禧)^④

東洋的、中國的なものが強調されるのは香港も同じである。

……裏面は立體化的西式佈置、但是也有幾件雅俗共賞の中國擺設。爐臺上陳列着翡翠鼻烟壺與象牙觀音像、沙發前圍着斑竹小屏風、可是這一點東方色彩的存在、顯然是看在外國朋友們的面上。英國人老遠的來看看中國、不能不給點中國給他們瞧瞧。但是這裏的中國、是西方人心目中的中國、荒誕、精巧、滑稽。

……中は立體的な洋式の配置だけれども、萬人受けするような中國の置物も飾られていた。暖爐の上には翡翠の鼻煙壺と象牙の觀音像があり、ソファの前に斑竹の小さな屏風が置かれている。しかしこうした東洋的な色づけは、明らかに外國の友人の面子をおもんばかったものだ。イギリス人が遠くからわざわざ中國を見に来ているのだから、少しばかりの中國を彼らに見せてやらないわけにはいかない。しかしこ

にある中國は、西洋人の心中にある中國だ。でたらめで、精巧で、滑稽な。(沈香屑——第一爐香)^⑤

張愛玲によって上海(香港)描寫の何が變えられてしまったのかはもう明らかだ。そこにある光景は「中國的なもの」のカラージュであって、既に「中國」であることをやめてしまっている。清末以來の作家たちが「かぎりなく洋に近い中國」を表現したのとは反對に、彼女は「紅樓夢」を思わせる細かな筆で植民地の景物が中國であることをいうのだが、その筆致が中國になればなるほど上海(香港)は「西洋人の想像する中國」になってしまうのだ。觸れれば壞れてしまう水面の像のような「中國的カラージュ」の中には、現實の中國はどこにもみあたらない。では植民地に住む中國人はどう生きているのだろうか。張愛玲自身の定義によれば「傳統的な中國人を、現代的な生活で高壓的に磨いて」^⑥できるという「上海人」については稿を改めて論じることにして、本論では「外國人」に對しての「傳統的な中國人」に觸れるにとどめておく。

「鄭氏は遺少で、民國を認めないために、民國元年から

年をとることをやめていた。美酒や女性や阿片を知っていても、心はまだ子どもの心だ。彼はアルコール漬けの子供の屍骸である。」「《花凋》^④

「(伯母は) 自分の小さな世界の中に清末の淫靡な空氣をひきとどめ、ドアを閉め切って小型の西太后になっていた。」「《沈香屑——第一爐香》^⑤

頑固に舊中國の夢を紡ぎ續けようとする、室内裝飾と同じように「でたらめで、精巧で、滑稽」な人々については、張愛玲の父をその原型として認めることができるだろう。清朝の名臣張佩綸を父に、李鴻章の娘を母にもった父親は、その財産を上海で消費するだけで、何らの生産的な仕事につくこともなかった。「私はそこ(父の家——筆者)にあるものを全てを見くびっていた。阿片、弟に「漢高祖論」を教える老先生、章回小説、物憂げに、埃を積もらせて生きていく。」「^⑥

父親をモデルとするであろう一世代上の登場人物が洋場に築いた「中國的な」世界は「國の中の國(ステイト・イン・ステイト)」と言われた租界の中に更に精巧に作られた國、

「洋場」の「洋人」(濱田)

「中國のなかの外國」にさらに作られた「外國のなかの中國」であり、戦火の「内地」(國民黨支配區の大後方もしくは共產黨根據地の解放區「非淪陷區」とは全く切り離されたものである。つまり上海の「傳統的中國人」もまた「本國」内地からの流亡者に他ならないのだ。内地こそを現實の中國とするならば、彼らは「小心翼翼とガラス玉の回りを這いまわりながら、決して中心へ入り込むことはできない蠅」《鴻鸞禧》でしかない。彼らを「アルコール漬けの子供の屍骸」と書いてする張愛玲は、父に象徴される「傳統的中國人」をも「外國人」と同じように相對化し、見事に戯畫化している。

結 び

以上、四十年代に活躍した張愛玲の、主に小説における外國人について述べてきた。彼女の小説に外國人が多數登場することも注意に値するが、それよりも張愛玲にあって初めて「英米人」金満家、「白系ロシア女性」娼婦かダンサー、「インド人」巡查か門番」といったステレオタイプ

が外されたことは、洋場文學の到達した一つの頂點といえるだろう。西洋人たちはその威容を失って東洋にさまよう異邦人となり、白系ロシア女性は娼婦に零落した王女ではなくごく普通のタイピストとして描かれ、いろいろな混血児がそれぞれの悩みを抱えている。張愛玲にとってこうした相對化が可能であったのは、もちろん一つには彼女が植民者の言語である英語を完璧に操ることができたため（張愛玲の實弟は、張愛玲は中國語以上に英語に長じていたという）、英語圏文化を盲目的に崇拜する必要がなかったことがあげられよう。（むしろ彼女の中國語能力を奇とすべきかもしれない。聖マリア女子學校で張愛玲を教えた中國人講師は、同校が國語等三科目以外全てが英語で教えられる徹底した英語重視教育法をとっていて、學生の殆どが中國語でメモをとることすらできなかったと證言している。）^⑤

時代の及ぼした作用も忘れていけない。一九四一年十二月八日、日本軍の突然の侵攻によって香港に榮えたイギリス文明は壊滅の危機に瀕した。同日日本は上海公共租界をも占領、日中戦争以來の抗日據點であった「孤島」も終焉

を迎えた。ナチスドイツの要請によって「國際都市上海」の様相はかろうじて保たれたものの、日本軍は市民の一月あたりの米、石炭の消費量を取り決め、「政治恐怖取締法」によって隨時封鎖を行い、隣組制度を實施して市民證を發行し、「敵性國人」の名士を次々にスパイとして捕らえ、浦東に設けたゲットーに追い込んでいく。^⑥ 前掲の若江得行は開戦後の印象を「一、もはや上海に於ては、英米勢力の再起は不可能なること。二、舊體制時代の上海の姿は、怕らく再びは見る事が出來かねるであらうこと」と述べる。租界の西洋人にとってかわることを望んだ日本人は性急に侵略をすすめた。一九四二年にはまだ五、八六五人のこっていた上海のイギリス人は、一九四五年には六七〇人に激減している。四十年代初の上海にとどまっていた西洋人たちは、もはや「王侯のやうな生活」を謳歌できるはずもなかった。開國いらい強者であり續けた彼らの樂園は終わつたのである。一九四一年十二月、香港大學での學業を斷念して三年ぶりに上海に戻った張愛玲が見た「洋人」の多くは本國に歸ることもままならないアッシュ夫人やアンバー

トンのような弱者であつたろう。

「中國の作家」になりきれなかった張愛玲は、上海が内地に組み込まれた時に出國を選んだ。渡米後の彼女がその英語力にもかかわらずアメリカを舞臺にした小説を全く書かなかつたばかりか、創作自體もほとんどなざなかつたことは、彼女が林語堂型の「海外作家」にもなれなかつたことを表している。張愛玲は小説の取材をするのにも、讀者を得るためにも淪陷期上海を——よそものに圍まれ、中國的なコラージュを装つた街と人とを必要としたのである。

本論では外國人——「傳統的中國人」を含む上海の「他者」について述べるにとどまり、「他者」に對して「自己」を、「外部」に對して「内部」を形成するはずの「上海人」については考察がとどかなかつた。次には張愛玲が讀者ともし、題材とした「上海人」と「内地人」の關係について考えることが課題となるだろう。また租界の最多數を占めていた外國人、日本人は初期の張愛玲の小説には全く現れない。日本人が「現れない意味」もいろいろ考えられると思うが、租界小説と日本人の關係についても、今後の課

『洋場』の「洋人」(濱田)

題としたい。

注

- ① 『都市漩流的海派小説』湖南教育出版社一九九五年 三頁。
- ② 鄭依仁『舊上海人口變遷的研究』上海人民出版社一九八〇年 八一頁。
- ③ 正確にいえば上海は『植民地』ではなく、上海市の一部が『租借地』であつたに過ぎないが、列強が政治的に中國人の優位にたち、經濟的に中國人を搾取するという意味で廣義の『植民地』にあてはまるので、以下上海をいう時に『植民地』という言葉を用いることにする。
- ④ 上海社會科學院出版社一九九一年。
- ⑤ 陸嵩『夷船入乍浦烟販閭姦殺青皮軍以應』阿英編『阿片戰爭文學集』中華書局一九五七年 一四〇頁。
- ⑥ 『籌辦夷務始末』咸豐朝卷三十三。
- ⑦ 同注②、以下人口に關する記述は特に注記しない限り同書に基づくものとする。
- ⑧ 『航海述奇』岳麓書社『走向世界叢書』一九八五年 五九三頁。
- ⑨ ハリエット・サージェント、淺沼昭子譯『上海——魔都百年の興亡』新潮社一九九六年 三七頁。原書 Harriet Sergeant Shanghai 1991, Jonathan Cape, London は未見。
- ⑩ 同注①、七頁。
- ⑪ 一九四三年十一月、朱樸主編『古今』三十三期。

⑫ 用洋人看京戲的眼光來看看中國的一切，也不失爲一棒有意味的事。頭上搭了竹竿，晾着小孩的開襠袴；櫃臺上的玻璃缸中盛着『參鬚露酒』；這一家的擴音機裏唱着梅蘭芳；那一家的無線電裏賣着癩疥瘡藥；走到『太白遺風』的招牌底下打點料酒……這都是中國，紛紜，刺眼，神祕，滑稽。多數的年輕人愛中國而不知道他們所愛的究竟是一些什麼東西。（略）我們不幸生活於中國人之間，比不得華僑，可以一輩子安全地隔着適當的距離崇拜着神聖的祖國。那麼，索性看個仔細罷！用洋人看京戲的眼光來觀光一番罷。有了驚訝與眩異，才有明瞭，才有靠得住的愛。

⑬ 大日本雄辯會講談社，昭和十七年（一九四二年）。なお、自序にはこの著述が「大東亞戰爭發生以前に脱稿したもの」であることを注記している。

⑭ Miss Eileen Chang……is a Chinese who, in contrast to most of her countrymen, does not simply take China for granted. It is her deep curiosity about her own people which enables her to interpret the Chinese to the foreigner.

⑮ Pot, F. L. Havoks, *A short History of Shanghai*, Kelsey and Walsh Limited, Shanghai, 1928. 引用したのは土方定一、橋本八男譯『上海史』生活社一九四〇年。

⑯ 劉呐鷗『都市風景線』一九三〇年四月，上海水沫書店所收。
⑰ 一九四四年四、五、六月，吳誠之主編『雜誌』に連載。

⑬ 『……我丈夫簡直「溺愛」中國東西呢！』聽她那遠方闊客的口吻，決想不到她丈夫是一半中國血統的。

⑭ 一九四三年六月，周瘦鵬主編『紫羅蘭』に掲載。

⑮ 一九四四年十二月，胡蘭成主編『苦竹』に掲載。

⑯ 汪之成『上海俄僑史』上海三聯書店一九九三年 八十二頁。

⑰ 上海工部局が一九四〇年六月の『公報』に『本埠支薪階級西僑生活費臨時指數』を掲載してイギリス、アメリカ、ロシアの家庭の收入について調査している。家庭の全收入における夫の收入はアメリカ家庭で八十三パーセント、イギリス人で八十七パーセントを占めるが、ロシア人については五十九パーセントと低く、「他の家族の收入」が十七パーセントと高い率を占めている。この數字はロシア人女性の多くが働いて家計を支えねばならなかったことを意味しよう。

⑱ 一九二八年三月十日。

⑲ 同注⑮、三三五頁。

⑳ 『夜總會裏的五個人』『公墓』上海現代書局一九三三年所收。

㉑ 白人的快樂，黑人的悲哀。非洲黑人喫人典禮的音樂，那大雷小雷似的鼓聲，一只大號角嗚呀嗚的，中間那片地板上，一排沒落的斯拉夫公主們在跳着黑人的蹺蹺舞，一條條白的腿在黑絨裏着的身子下面彈着……（略）跳着，斯拉夫的公主們，跳着，白的腿，白的胸脯兒和白的下腹，跳着，白和黑的堆……」蹺蹺是未詳。

②⑦ 一九四四年二月、『雜誌』に掲載。

②⑧ 『……在上海，有很少的好俄國人。英國人，美國人也少。德國人只能結婚德國人。』

②⑨ 彷彿那是世界上最自然的事——一個年輕漂亮的俄國下級巡官，從小和她在一起的。可是汝良知道：如果她有較好的機會的話，她決不會嫁給他。

③⑩ 『張看』自序、臺北皇冠出版社 一九七六年。

③⑪ 同注②①、二五三頁。

③⑫ 同注⑨、六三頁。

③⑬ 一九四三年九月、十月、『雜誌』に連載。

③⑭ 『武田泰淳全集』筑摩書房第十八卷。

③⑮ 一九四三年五月、『紫羅蘭』に掲載。

③⑯ 年紀不過十五六歲；她那皮膚的白，與中國人的白又自不同，是一種沈重的，不透明的白。雪白的臉上，淡綠的鬼陰陰的大眼睛，稀朗朗的漆黑的睫毛，墨黑的眉峯，油潤的猩紅的厚嘴唇，美得帶點肅殺之氣；

③⑰ 『我自己也是雜種人，我就吃了這個苦。你看，我們的可能的對象全是些雜種的男孩子。中國人不行，因為我們受的外國式的教育，跟純粹的中國人攪不來。外國人也不行！這兒的白種人那一個不是種族觀念極深的？就使他本人肯了，他們的社會也不答應。誰娶了個東方人，這一輩子的事業就完了。這個年頭兒，誰是那麼個羅曼諦克的傻子？』

③⑱ 混血的女性が強烈な性的吸引力を與えられる一例として、

『洋場』の「洋人」(濱田)

錢鍾書が一九四四年に上海で書き始めた『圍城』の鮑小姐があげられよう。マカオ生まれの中葡混血である彼女はその美貌とプロポーションで人を誘惑することに對して絶大な自信を持っている。それに對して、主人公の中國人留學生方鴻漸は彼女に熱をあげながらもはつきり「自分は鮑小姐を欲しいだけで、愛しているわけではない」ことを自覺しているのである。

③⑲ 這艾許小姐抿着紅嘴唇，不大做聲，在那尖尖的白桃子臉上，一雙深黃的眼睛窺視着一切。

④⑩ 她是一無所有的年輕人，甚至於連個性都沒有，竟也等待着整個世界的來臨，而且那大的陰影已經落在她臉上，此外她也無表情。

④⑪ 我們凡是住在位居世界第六大都會的上海，就可以享受到一切異國情調的生活。我不敢把龍華塔來比巴黎鐵塔，也不敢說蘇州河是中國的威尼斯水道。但是，馬賽港埠式的黃浦灘，紐約第五街式的南京路，日本銀座式的虹口區，美國唐人街式的北四川路，還有那夏天黃昏時候的霞飛路，處處含有南歐的風味，靜安寺路與愚園路旁的住宅，形形色色的建築，好像是瑞士的別墅野宮，宗教氣氛濃郁的徐家匯鎮，使人幻想到西班牙的村落，吳淞口的海水如果變了顏色，那不說話像衣袖海嗎？

④⑫ 『寫在卷頭』『異國情調』上海世界書局一九二九年所收。

④⑬ 『上海的狐步舞』『公墓』上海現代書局一九三三年所收。

④⑭ 初出未詳。『傳奇』增訂本一九四七年十一月、上海山河圖

書公司に所收。

④ 後者の最後の一文は、前掲した『西洋人が京劇などをみる』との一文、「これらはみな中國だ、入り組んでいて、まばゆくて、神祕的で、滑稽な。」とほぼ同じである。

⑤ 『到底是上海人』『雜誌』一九四三年八月。

⑥ 鄭先生是個遺少，因為不承認民國，自從民國紀元起他就沒長過歲數。雖然也知道醇酒婦人和鴉片，心還是孩子的心。他是酒精缸裏泡着的孩屍。

なお、張子靜『我的姊姊張愛玲』臺北時報出版一九九六年はこの鄭先生のモデルを張愛玲の母方の叔父、黃定柱であると言う。(二六二頁)。

⑦ 一九四四年三月、『雜誌』に掲載。

⑧ 在自己的小天地裏、留住了滿清末年的淫逸空氣，關起門來做小型慈禧太后。

⑨ 『私語』一九四四年四月、蘇青主編『天地』に掲載。

⑩ 張子靜『我的姊姊張愛玲』、『燭』一九四四年十月初出。唐文標編『張愛玲資料大全集』臺北時報文化出版事業有限公司一九八四年他に再録。

⑪ 汪宏聲『記張愛玲』、『語林』一九四四年十二月初出、『張愛玲資料大全集』などに再録。

⑫ 唐振常主編『上海史』上海人民出版社一九八九年 第二十四章。